

人と語る

農村民泊が教えてくれる古き良き日本の生活

グリーンツーリズム農村民泊「ゆずりはの里」 佐藤 健さん 美代子さん

大分県北部に位置する安心院(あじむ)町。日本の原風景をとどめる豊かな自然を生かした「グリーンツーリズム(農村民泊)」と呼ばれる観光事業の発祥の地として知られています。安心院町はぶどう農家が多く、農閑期の収入源や地域振興策の一環としてヨーロッパをお手本にしたグリーンツーリズムをいち早く取り入れました。自然志向の高まりもあって、今ではたくさんのリピーターが訪れる人気エリアにもなっています。今回の「人と語る」は、安心院町で農村民泊「ゆずりはの里」を営む佐藤さんご夫婦にお話を伺いました。

グリーンツーリズムとは
農村や山村などで自然や地域文化と親しむ滞在型レジャーの1つ。観光を楽しむだけでなく、農作業体験や農村の暮らしを学んだり、地元由来の食文化に触れることからナチュラル志向の都市生活者を中心に人気が高い。欧州では農村に長期滞在してパカンスを過ごす風習があり、イギリスではグリーンツーリズム、フランスではツーリズム・ベール(緑の旅)と呼ばれている。



佐藤 健・美代子さんご夫妻
夫の健さんは大学卒業後、大阪の食品系の大手企業に24年間勤めた後、故郷の安心院町に戻り、築150年の古民家を改築して夫婦で農村民泊「ゆずりはの里」を始める。日本古来の安らぎとおもてなし、自家栽培による田舎野菜や地元産の食材にこだわった家庭料理が自慢。
ホームページ：<http://yuzurihanosato.jimdo.com/>

築150年の古民家の改築。「間」を大切に作る家づくり。

農村民泊「ゆずりはの里」を始められたきっかけはなんですか。

健さん「24年間大阪でサラリーマン生活をしていましたが、ふとしたことから会社と自宅を往復するだけの毎日に疑問が浮かびました。「より人間らしい生き方とは何なのだろう?」と考えた時に、少年時代を過ごした安心院町の風景が心をよぎりました。そんなことを考え始めた頃、偶然にも実家の農業を継ぐことになりました。ただ、農地の規模が小さいので農業だけでは生活がままならないのは明らかです。そこで農村民泊「ゆずりはの里」を始めることにしました。安心院町では新しい観光産業の創出や地場産業の育成を狙いとしたグリーンツーリズムに力を入れ始めた時期でもあり、振り返ってみると「ゆずりはの里」の起業はなるべくしてなった運命のようにも思えます。」

素晴らしい古民家ですが、ご実家を改築されたのですか。

健さん「購入後に地元の大工さんたちと一緒に自分たちの手で改築しました。これも運命的な出会いですが、ある日、この古民家の前の道を車で走っていると、おばあさんが縁側に座って一人で桜の花を眺めているのをみかけたのです。暖かな陽だまりの中、満開の桜を幸せそうに見ているおばあさんの姿を見て「何て素敵な光景なんだろう」と強く印象に残りました。その後この古民家が売りに出されたと聞き、農村民泊をやるならこの古民家しかないで購入したのです。」
美代子さん「ですが、築150年の家屋は予想以上に傷みが激しく、改築には1年10か月もかかってしまいました。寒い冬は七輪で手を温めながらの作業で大変でしたが、その苦勞も今では楽しい思い出です。」

改築の際にこだわったことはありますか。

美代子さん「『間』を大切にすることです。現代の家は無駄な空間を排除して合理的に作ることを考えますが、本来の日本建築は一見すると無駄な空間を大切にしてきたように思います。『間』は禅思想の『無』にも通じる日本独自の文化ではないでしょうか。日本家屋ならではの居心地の良い空間を意識して改築を進めました。」



「ゆずりはの里」はこだわりの食材で作るお料理が人気だとのことですが。

美代子さん「野菜や米は無農薬で種から育てたものを使い、肉類は地元産のジビエ肉、お魚は近くの川で獲った川魚を中心にしています。」

健さん「私たちにとっては当たり前の田舎野菜ですが、都会のお客さんにはこんなに美味しい野菜は初めて食べたと感動する方も多いです。また、スーパーで並んでいる野菜はどれも均一な形をしています。野菜は不揃いなのが自然の姿です。年配の方が形の悪い野菜を見て懐かしいと喜んでくださるのも嬉しいですね。」

どうして無農薬・無添加にこだわるようになったのですか。

健さん「実は、最初から無農薬・無添加の食材で行こうと決めていたわけではありませんでした。この古民家、この自然環境で過ごしていくうちに確立されてきたスタイルなんです。無農薬栽培のやり方は試行錯誤で編み出した自己流です。最初は周りの人たちから「作物よりも雑草のほうが多いじゃないか」とからかわれましたが、そんな時でも「これが無農薬の証拠だよ」とめげませんでした（笑）。その甲斐あって、今は害虫に負けない美味しい無農薬野菜ができるようになりました。ただ、成功したからといってそのスタイルを繰り返すだけでは面白くありません。もっと良い方法があるんじゃないか、もっと美味しい野菜を作るにはどうしたらいいんだろうと考えるとワクワクしますし、それが楽しいですね。」

美代子さん「まあ、マニュアル通りにやるのが嫌いな変わり者なんです（笑）。」

マニュアル通りは嫌。無添加・無農薬は自己流。



農業・農村体験学習の学生も受け入れているようですが。

美代子さん「関西、関東方面から中学生を受け入れています。土いじりをしたことの無い都会育ちの子にとって、野菜の種まきや収穫などの農業体験はとても新鮮なようです。また、梅干ししか知らない子供が梅の実が木になっていて、その色が青いというのを初めて知って驚いたり。そんな子供たちの反応を見るのも楽しいですし、一緒に勉強させてもらっています。」

農村民泊をやっていて幸せを感じるのはどんな時ですか。

美代子さん「やはり人との出会いですね。安心院町にしながら国内外の多くの人と出会い、語ることができる。お客さんとは毎回夕飯を共にするのですが、本当の家族や親戚のように団欒しています。これほど幸せなことはありません。」
健さん「おもてなしの心を大切にしつつもお客さんを必要以上にお客様扱いし過ぎないように心がけています。お客さんには遠い親戚のおうちに遊びに来た感覚でリラックスして欲しいからです。安心院町のグリーンツーリズムは“1回泊まれば遠い親戚。10回泊まれば本当の親戚”をキャッチコピーにしているのですが、まさにそんな気持ちで農村民泊をやっています。」

これからどんな農村民泊にしていきたいですか。

健さん「お客さんを楽しませるためにはまずは自分が楽しむべし。どうしたらお客さんが喜んでくれるだろうかとあれこれ考えることも、私の楽しみのひとつです。ただ、農業は自然が相手ですので何が起こるか分かりません。農村民泊も肩肘張らず「起こることは起こるべくして起こるのだ」という自然体で続けていければいいなと思います。」
美代子さん「お客さんの『また遊びに来るね!』の一言が何よりの励みになります。いつまでもその言葉を聞けるような農村民泊でありたいです。」

農村民泊の魅力は人との出会い。
安心院町にしながら世界と出会える。